

第2学年2組 道徳学習指導案

授業日 平成27年9月30日(水) 授業B

授業者 附属新潟小学校 教諭 剣 仁美

会場 2年2組教室

1 主題名 何のために 謝るのか？

資料名 きゅうしょくじゅんびの時間

(出典「新版 こころ つないで2」ほんとうの こと 教育出版 一部改作)

2 本主題の価値

本主題は、平成27年7月に告示された学習指導要領解説解説第1学年及び第2学年の内容に準拠して設定したものである。

A 主として自分自身と関わること

正直, 誠実

(2) うそをついたりごまかしをしたりしないで, 素直に伸び伸びと生活すること。

善悪の判断, 自律, 自由と責任

(1) よいことと悪いこととの区別をし, よいと思うことを選んで行うこと。

B 主として人との関わりに関すること

友情, 信頼

(9) 友達と仲よくし, 助け合うこと。

子どもは、今までの生活経験や規範意識から、「嘘をついたり、ごまかしたりしてはならない」「悪いことをしてしまったときは、正直に謝らなければならない」など、よくないことをしてしまったときには、素直に謝らなければいけないことを知っている。低学年の子どもは、発達的特質から、特に自分自身の言動を叱られたり笑われたりすることから逃れるために、嘘をついたりごまかしたりして暗い心になることが少なくない。自分自身の言動で相手にどう思われるかを気にしてしまい、いつも正しい行動を取ることが難しいのである。そのため、望ましい行動が分かっているながらも自分の主観的な考え方や感じ方、相手との関係から、よいとする行動を取れないことがある。学級内での人間関係や力関係、友達の性格などを知ったこの時期に、正しいと思ったことを進んで行おうとする心情を育てる。

このような学習を具現するために、本主題では「ほんとうの こと」を「きゅうしょくの じかん」と改作し、資料として取り上げる。資料の内容は、次の2つの場面から構成されている。

【子どもの生活に近く、主人公の気持ちに共感しやすい場面】

① 給食準備の時間、急いで列に並ぼうとした「ぼく」が、ゆいさんにぶつかってしまう。ゆいさんは、持っていた牛乳瓶を落としてしまう。すると、ひろしが「大変だ。牛乳の海だ～」と騒ぎ始める。周りにいた学級の友達も集まってきた。「ぼく」は、なかなか言い出すことができない。

「ぼく」が黙っていると、「ぶつかったのは、りょうくんじゃないの」「りょうくん謝りなよ」と、みんながりょうくんを責めはじめた。りょうくんは「ぼくじゃないよ」と言っている。「ぼく」は、(りょうくんじゃないのに。でも、黙っていたら分からないかも。どうしよう…) と考えてしまうという場面。

【主人公が取った行為を知り、よりよい解を創り出す場面】

② 「ぼく」は思い切ってみんなの前に出ると、ゆいさんにぶつかったのは、ぼくであることを告げるという場面。

子どもは「みんなに責められるのではないか」「先生に怒られるのではないか」などの理由から、嘘をついてしまったり、ごまかしてしまったりという経験がある。このような生活経験をもっている子どもは、なかなか素直に言い出せないという主人公の気持ちに共感することができる。そして、素直に謝ることができた主人公に共感しつつも、「なぜ、もっと早く謝らなかったのだろう」と謝るにもタイミングが重要であることを指摘する。その際に、本資料は、子どもが自分の生活経験に照らして主人公に共感しながらも、資料の場面に合った行為を考えることができるものである。資料の場面に合った行為を考える際に、子どもはそれぞれが大事に考える道徳的価値に基づく考え方や感じ方で意見を述べる。正直、誠実を大切に思う子どもは「悪いと思ったときに、すぐに謝るべきだった」と考え、相手のことを大切に思う子どもは「りょうくんのせいになってしまったときに、迷わずすぐに言うべきだった」と考えるなど、早く謝るべきだったという同じ行為の中にも、様々な考え方や感じ方が出る。様々な考え方や感じ方に触れることで、自分自身の考え方や感じ方が広がる。

資料をきっかけにして、学級の友達の多様な意見を聴き合い、よりよい解を見いだす学習を繰り返すことは、実際の生活場面での選択肢を増やすことにつながる。

3 本主題で目指す姿と「中核的な知識や技能」「学びをつなぐ力」

(1) 目指す姿

よりよい解を見いだす子ども何のために謝るのかを考え、場面や状況に合った行為の意味を判断する子ども。

(2) 「中核的な知識や技能」

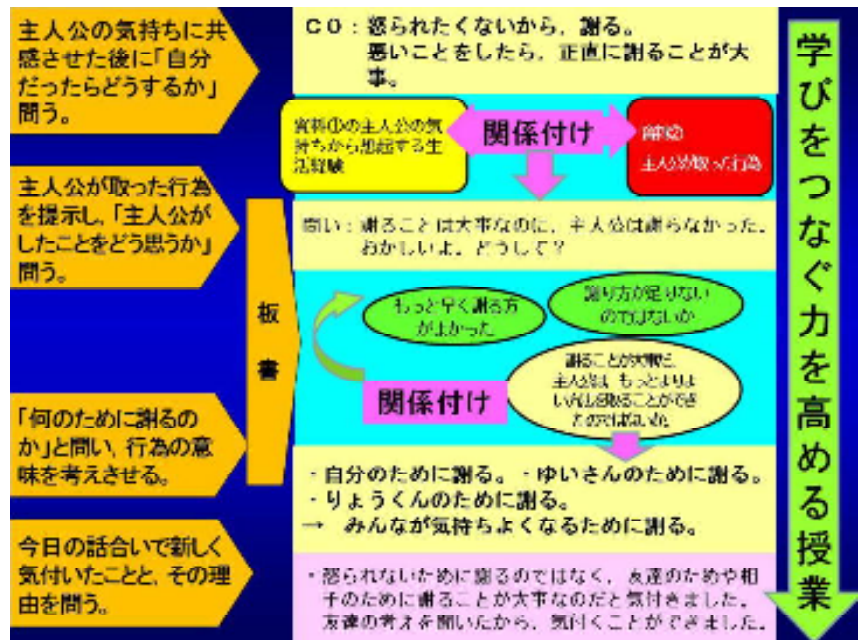
価値観の高まり

「怒られたいから謝る」という価値観から、「謝るのは、自分のため、相手のためなんだ」と気付き、「みんなが気持ちよくなるために謝ることが大事なんだ」と謝ることに対しての考え方や感じ方が高まること。

(3) 「学びをつなぐ力」

道徳的判断力

関係付けるすべを用いて、自分の考え方や感じ方と、友達の考え方や感じ方とを結び付けて、場面や状況に合った行為の意味を判断する力。



4 指導計画 全1時間 (30)

単元カード参照

5 指導の構想

子どもは、それぞれの生活経験や生育環境など違いから、様々な考え方や感じ方をもっている。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

主人公の気持ちに共感させた後に「自分だったらどうするか」と問う。

個々の価値観(価値に対する考え方や感じ方)を表出させるための働き掛けである。資料①の場面を人形劇で提示しながら読み聞かせる。本資料は、給食の準備場面であることや、偶然起こってしまった出来事であることから、子どもは主人公の気持ちに自然と共感しやすい。「わあ、どうしよう」という主人公の心情を取り上げ、そのときの気持ちを問う。子どもは、「やっちゃった、やばい」「先生

に怒られる」「言わなければいけないけれど、みんなに責められるかもしれない」と考え、主人公の気持ちになって考える。このような子どもに「自分が主人公だったらどうするか」と問う。子どもは、主人公の気持ちを考えながらも、自分が取るであろう行為を考え「自分だったら謝る。だって、怒られたくないから」「自分だったら、謝る。だって、隠していたら後でばれてみんなに何か言われるかもしれないから」(※C1の子どもの姿が本研究におけるC0とする)などと、行為とその理由をワークシートに記述する。主人公の気持ちを酌みながらも、自分だったら謝るという姿を本時のC0とする。

資料の提示は、人形劇で行う。人形劇は、枠の中で行う。枠の中で場面を提示することで、その場で起こっている状況や、登場人物同士のかかわりを限定して提示することができるからである。また、場面を枠で限定することで、子どもは資料の場面に入り込みやすくなる。

働き掛け2

主人公が取った行為(「対象」)を提示し「主人公がしたことをどう思うか」と問う。

問いをもたせるための働き掛けである。主人公の気持ちに共感した子どもに、**資料②の場面(「対象」)**を提示する。資料②の場面は、主人公が取った行為が分かる場面である。子どもは、資料②の場面から、「謝るならもっと早く謝った方がよかった」と考える。主人公が取った行為に納得していない子どもに「主人公のぼくがしたことをどう思うか」と問い、ネームプレートで主人公の行為を評価させる。評価は、右図のような数直線上にネームプレートを貼らせて行う。子どもは、自分とは異なる友達のネームプレートの位置を不思議に思い、なぜその位置に貼ったのか知りたくなる。そこで、ネームプレートを貼った根拠を説明させる。子どもは「がんばって言えたから偉いと思うが、もっと早く言わなければダメだ」「ゆいさんにきちんと謝った方がよい」などと、謝るタイミングや謝り方について主人公の行為に不十分な点を述べる。子どもは、「自分が主人公だったら謝る。でも、主人公はすぐには謝れなかったのなぜだろう」と考えている。

ここでの子どもは、謝るという行為が大事であると考えているものの、「何のために謝るのか」という謝ることの意味までは考えていない。

働き掛け3

「何のために、謝るのか」と問い、行為の意味を考えさせる。

多様な立場や異なる視点をもたせるための働き掛けである。謝ることがよいことだと考えている子どもに、「何のために謝るのか」と問う。子どもは、悪いことをしたり失敗したりしたら謝ることが当然だと考えているため「何のために謝るのだろうか」と戸惑う。行為の意味を問うことで、謝ることの本質的な意味を考えさせるのである。子どもは、「自分のため」「ゆいさんのため」「りょうくんのため」など、多様な立場や異なる視点で謝ることの意味を考える。そして、交流させることで、自分とは異なる考え方や感じ方に触れることができる。自分と異なる考え方や感じ方に触れた子どもは、自分自身にはなかった考え方や感じ方を知り、**よりよい解を見いだす子ども**となる。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け

今日の話合いで、新しく気付いたことと、その理由を問う。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けである。資料の場面を通して、謝ることの意味を考えた子どもに「今日の話合いで、新しく気付いたことは何か」と問う。子どもは、関係付けるすべを用いて、自分の考え方や感じ方と、友達の考え方や感じ方とを結び付けて、場面や状況に合った行為の意味を判断し、記述する。そして、「気付くことができたのは、なぜか」と問い、ワークシートに記述させる。子どもは、理由として「友達と話し合ったからだ」と友達と交流することや友達の考えを聞くことを挙げる。新たな気付きやその理由を考えられたのは、友達の考えを聞いたからであると記述した子ども(Cn)が「学びをつなぐ力」の有用性を自覚した姿である。

6 本時の構想 (本時 1/1時間)

(1) ねらい

関係付けるすべを用いて、自分の考え方や感じ方と、友達の考え方や感じ方とを結び付けて、場面や状況に合った行為の意味を判断することができる。

(2) 主張(展開) 3Q (45分)

このような子どもに

- ・悪いことをしたときは、謝らなければならないことを知っている。
- ・叱られるのが嫌だという理由で、自分がしたことを隠そうとすることがある。
- ・その場の状況や相手によって、謝ることができるときとそうでないときがある。

このように働きかけると【働き掛け1】

- 資料の場面①を人形劇で提示し、主人公の気持ちに共感させる。
 - ・説明「今日のお話は、「給食準備の時間」というお話です。どんなお話かな。ちょっと、覗いてみましょう」
 - ※子どもを教室の前に集め、読み聞かせる。
 - ※読み聞かせると同時に、ハンドパペットで人形劇を行い、資料の場面を三次元の場として表現する。
 - ・発問「ぼくは、どんなことを思っているのでしょうか」
 - ※発言ごとに、同じように思う人はいるかと問い、挙手を促す。
 - ・説明「どうしようという気持ちにもいろいろな思いがあるのですね」
- 自分が主人公だったらどうするか考えさせる。
 - ・発問「あなたがぼくだったら、どうしますか」
「どうして、そうしようと思うのですか」
 - ・指示「ワークシートに書きましょう」
 - ※大半の子どもは、「謝る」と記述する。理由としては、悪いことをしたら正直に謝らなければいけないから。隠してもばれてしまうから。怒られてしまうから。これらは、どれも相手意識が欠けている。

このようになり (C1) ※本時のC O

- 本時の道徳的価値(正直, 誠実)を確かめ、自分の経験とかかわらせて主人公の気持ちを考える。
 - ・分かる, 分かる, その気持ち。
 - ・「やばい, やっちゃった。どうしよう」って思っていると思います。
 - ・先生に怒られると思って, どうしようと思っていると思います。
 - ・言わなきゃいけないと思っているけれど, みんなに何か言われるんじゃないかと思って「どうしよう言い出せないよ」と思っているんだと思います。
- 主人公の立場に立って, 「自分だったら」と取る行為を考える。
 - ・ぼくだったら, 勇気を出して思い切って「ぼくがよそ見をしていて当たっちゃったんだ」と言います。だって, 悪いことをしたら謝らなければいけないからです。
 - ・私だったら, がんばって言います。だって, 後になればなるほどたくさん怒られるからです。
 - ・言います。どうせ, 隠してもばれてしまうからです。隠していてもばれたほうが, もっとおこられるかもしれないからです。

このように働きかけると【働き掛け2】

- 資料②の場面を提示し、主人公が取った行為の善し悪しを問う。
 - ・説明「ぼくは、一体どうしたのでしょうか。がんばって言えたのかな。続きを覗いてみましょう」
 - ※子どもを黒板の前に集め、読み聞かせる。

※読み聞かせると同時に、ハンドパペットで人形劇を行い、資料の場面を三次元の場として提示する。

※提示の仕方

主人公が言い出せずにいることで、クラスが大騒ぎになってしまう。主人公は再び言い出せずに迷ってしまう場面で間をとる。子どものつぶやきがあれば取り上げる。

その後、資料の最後まで読み聞かせる。

- ・発問「主人公のぼくがしたことをどう思いますか」
- ・指示「ネームプレートを貼りましょう」

※よい・中間・よくないの間にネームプレートを貼らせ、ぼくの行為を評価させる。

※貼った場所についての根拠を発表させる。

- ・発問「どうして、この場所に貼ったのですか」

※子どもが発言する理由を板書する。

このようになり (G2)

○ 資料②の場面を知り、主人公が取った行為について考える。

- ・どうして迷うの？りょうくんのせいにされちゃったよ。早く言えばいいのに。
- ・みんなのせいにされるかもしれないって思っているから、言い出せないんじゃないのかな。
- ・よかった。がんばって言えたんだね。
- ・でもさ、ゆいさんには謝ったのかな。
- ・もっと、早く謝ればいいのに。

※ネームプレートを貼る。

※ネームプレートは、グループごとに貼りに行くように指示する。

- ・バラバラに貼られたな。少しずつずれているよ。
- ・みんな違う場所に貼っているね。

※友達のを考えを聞く。

【よいに近い】

- ・ぼくは、がんばって言えたから偉いと思ったからです。でも、どうせ言うならもっと早く言う方がよかったから、よいと中間の間に貼りました。

→ 早く言い出すべきだ

【中間とよくないの間】

- ・正直に言えたのはいいのだけれど、りょうくんのせいになる前に言わなかったからよいではないと思います。

→ 人のせいになる前に言い出すべきだ

【よくない】

- ・大変なことになってから、言ったから「ぼく」はよくないと思います。
- ・言えたのはよいけれど、ゆいちゃんに謝っていません。きちんとゆいさんに謝ることが大事だと思うから、よくないにしました。
- ・がんばって言えたのは偉い。だけど、りょうくんにも謝っていないよ。きちんと謝らなくちゃダメだと思います。

※問い：自分が主人公だったら、早く言って謝る。なぜ、主人公の「ぼく」は、こんなになるまで言わなかったのか。言えなかったのか。

このように働きかけると【働き掛け3】

○ 「謝ること」について考えさせる。

- ・説明「自分なら、すぐに謝るとみんなは言いました」
- ・発問「何のために、謝るのですか」

※子どもが止まったり、全く考えが出ないようならば、次の補助発問をする。

- ・補助発問「誰のために、謝るのですか」
- ・発問「自分のためってどういうことですか？」

- ・説明「何のために謝るのか、いろいろな考え方が出ましたね。どれも正しいと思うことをするために謝っているのですね」

このようになり (G3)

- 何のために、謝るのかを考える。
 - ・何のためかな？
 - ・ゆいさんのためかな。
 - ・りょうくんのためかな。
 - ・自分のためかもしれない。
 - ・謝らないでいると、気持ちがモヤモヤするし、何だか嫌な気分になるから。
 - ・正しいことをしないと、気持ちがモヤモヤするばかりだから、謝るのかもしれない。
- ※もしも、謝らないとどうなるのかを考え、誰のために、どうして謝るのかを考える。

このように働き掛けると【「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け】

- 今日の話合いで、新しく気付いたことや考えたこと、そのように考えた理由を問う。
 - ・発問「今日の話合いで、新しく気付いたことや考えたことはどんなことですか」
 - ・発問「それは、どうして気付いたり、考えたりすることができたのですか」

このようになる (Gn)

- 新しく気付いたことや考えたこと、その理由を考える。
 - ・何のために謝るのか気付きました。それは、怒られたくないからだけでなく、友達のためや自分のためにも謝ることが大事なんだと気付きました。なぜ気付くことができたかという、友達の考えをいろいろ聞いたからです。

7 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な知識や技能」を獲得することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」の有用性の自覚をすることができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、自分とは異なる友達の考え方や感じ方に触れ、新たな視点が加わったかどうかをワークシートの記述から検証する。
- ② 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けを受けて、関係付けるすべを用いて、新たな気付きや考えたことがあるかをワークシートの記述から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けを受けて、本時の話合いで新しく気付くことができた理由をワークシートの記述から検証する。